

しい行動、生活力があつた。やっと懐かしい故郷に帰つても、多くの苦勞があつた。奥様はあまりの過勞がもとで、肺結核を発病され、しかも度々の再発を繰り返したのである。先生は家族を愛し、教育にも専心努力され、その逞しい情熱と優しさには、ただただ感動を人々に与えた。

昭和五十四年、弥栄総会が栃木支部にて開催されたとき、ご夫婦で出席くださった。

村の方々に、殊に教え子や地区の方々に囲まれた先生夫妻は、感無量の様子だった。その後も遠方の支部会にもご出席の榮を賜っている。

先生はあらゆる困難に直面しても、常に誠実に最善の努力をされる方であり、弥栄村にて直接ご薫陶を戴かなかつた我々二世でも、人生の師として尊敬している。

先生は定年後にワープロ、製本、短歌等々に多趣味であり、その地域の方々に多大の貢献をされている。

(弥栄会会長 藤巻 禧四郎)

運命とあきらめて生きてきた私

福島県 山崎 照子

私の祖先は、紀州の殿様にお仕えした家柄だったが、明治維新で武家制度は廃止となり、明治六年生まれの父は、苦勞して船の機関長の免許を取得して、私たちが一家は、和歌山県の田辺より門司に移り住みました。父は、大日本製糖会社に、四十年近く勤めていました。思い出としては、春夏秋冬の楽しい社員家族の行事があり、大正八年生まれの私ですが、当時は幸福な子供時代を過ごしました。四歳で生みの母を亡くしましたが、そのお葬式でたくさんの人がきてくださるの、喜んでいたのが、人々の涙をさそつたとのことでした。

父は、昭和十二年、私が女学校を卒業した年に亡くなりましたが、両親の庇護のもと、楽しい少女時代・学生生活・悔いのない青春時代を、出船入船でにぎわ

う港町門司で過ごしました。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋事変、日支事変と、戦争の足音が迫るのも知らず、長い袖をひらひらと、ゼいたく品を身につけての娘時代でした。「父よ、貴方は強かった」「見よ東海の空あけて」などを歌って、岸壁で出征兵士をたくさん見送りました。そのうちに遺骨を迎えに行く回数も、多くなりました。町からは若い元氣な男性の姿が、だんだんなくなり、姉夫婦も北支太原に、門司鉄道より転勤、従妹も結婚して新京に渡り、大陸があこがれのこのような時代でした。

夢多き青春の真ただ中、親しかった男性も、つぎつぎと出征して行きました。ただ一人、心を通わせていると信じていた男性を、大分にある兵舎に、何度か面会に行きました。幾日も考えて、ためらいながら「お帰りになるまでお待ちします」と、やっと言いました。返ってきた言葉は「自分は戦死を覚悟している。もし帰っても障害者になっているかもしれない。縁あれば、良い人と結婚してほしい」と言うことでした。思いがけない返事に、その後見合い結婚をすることを

決意しました。彼に知らせると、すぐに返事がきて「男として、言いたいことも言えないときのあることを、将来を通じて知っておいてほしい」と書いてありました。『しまった』彼の心の奥を察することができなかった、おろかな私と、分かったときにはすでに結納のあとでした。これが私の運命の別れ道となりました。あとで考えると、何もかもくつがえしてしまえば、よかったのかもしれないが、若い私の頭ではどうすることもできず、大連にいる男性に嫁ぐことになりました。その当時には珍しいカメラ・ステレオ・ギターを持つという方で、それにもあこがれがあったのかもしれません。

見合い一度で、昭和十五年に結婚しました。

父亡きあと、義母は洋服店をしていましたが、私に着物を作るのが楽しみでした。近所の人からも、私の外出姿を見るのが楽しみだったと言われるくらいでした。そんなたくさんの着物と白装束を持って、主人と私の母と三人で渡りました。

母は一週間の間に、大連の浪速町で家具・茶碗・箸

までそろえてくれました。特に、朱塗りに目をちりばめた鏡台は、私のお気に入りでした。母は、明日帰国するという日、圧力鍋の操作をあやまり、蒸気をもろに顔にかぶって、お岩さんのような顔になってしまい、一晩中「ヒーヒー」苦しみながらも、泣いておろおろしている私に、「あんたでなくて、よかった」と言ってくれました。その言葉・その母心に、私はまた泣いてしまいました。

母は父の後妻で、私を四歳の時から大切に育ててくれました。小学校一・二年まで、母の姿が見つからないと、学校から帰ってシクシク泣いていた私でした。娘になっても、買物に行くと、おねだりする私の言うとおりに買ってくれて、私はハンドバック一つ持っただけで、荷物は全部持ってくれるような母でした。

私は「母は世界一」と、いつも周りの人に言っており、私は父兄会にきてくれる美しい母が自慢でした。七十年前の昔のことなのに、今だに母を知ってる友人は、母の美しさを覚えていてくれます。

犬・猫でも、我が子をかわいがるのは当たり前です。

まして義理の仲の私を我が子のようにかわいがってくれた、母のことは忘れられません。

たまたま、入院先の病室で一緒になった江頭さんが、私同様やはり満州から引き揚げてこられた方で、引揚げ時のことを書いてみたらとすすめられました。その夜は一晩中眠れず、大連の思い出より、母のことが強く思い出されてしまいました。

大連では、アカシヤの並木道を馬車に乗ったこと、星ヶ浦の桜見物に行ったこと、小学校の入口には、たしか虎のはく製があつたことなどが思い出されます。

大連市大和町の赤れんがの官舎が、私たちの新居でした。近くには大連病院がありました。鏡が池は、冬になるとスケートで遊ぶ人たちで、たいへんにぎわっていました。紀元二千六百年（一九四〇年）のお祝いの年に結婚した私は、長女（十六年）、長男（十七年）、次男（二十年）を、出産しました。

大家族で育った私は、購買部で三百匁のもやしを買ったら、その多さにびっくりしました。返すこともできずに、下駄箱に隠してあとでこっそり捨てたりしたこ

ともありません。

昭和十六年太平洋戦争が始まると、防火訓練もあり、次々とお腹が大きくなる私は出ることもなく、子育てに一生懸命でした。米・味噌・しょう油・酒など、何時間も並んで買う時代でした。上の子をおんぶして、下の子は家に残したままで、帰ってみると子供は泣き寝入りを繰り返して、声も変わってしまつて、かわいそうに思いましたが、そんな時代だったので、仕方ありませんでした。

ラジオからは、次々と玉砕のニュースが流れる中、とうとう主人も召集されてしまいました。

主人の顔を見るのも、これが最後かもしれない、三人の幼い子供を抱えて、これからいっただいどうして生きていけばよいのか、不安で目の前が、真っ暗になってしまいました。

ところが、主人は一泊ただけで、帰されてきました。たたくさんのシラミのおみやげを持って……。私は、安堵の胸をなで下ろしました。

十二月八日の日米開戦のときから、何となく感じて

いた不安が的中し、昭和二十年八月十五日、玉音放送を聴きました。私たちは、どうやって帰国するか、朝鮮を回って帰るか、いろいろと評定しました。

前年大和町から、美しい町並みの若葉町に転居していましたが、そこは日赤病院の近くでしたので、割に静かで、私たちは別に逃げかくれすることもありませんでした。

日本の敗戦と同時に、ソ連軍がトラックで乗りつけ、市内の工場の機械を、夜中にどんどん運んで行きました。近所の御主人たちは、石炭を確保するため夜中にどこからか運んでくるようでしたが、我が家の主人は「おれにはおれの、考えがある」と言つて動きません。私は、着物をたくさん売って、全部石炭に換えてしまいました。これから寒くなるので、はいはいを始めました子供たちを、寒さから守るためには必要なものから……。

粗食の日々が、続きました。そんなある日、大連におられた野球ファンなら、だれもが御存知の大連実業団の青柴投手夫人から、牛肉や砂糖をいただきました。

青柴夫人と私は、女学校の同期生でしたので、時々、夫人はファンにいただいた食料品を届けてくださいました。本当にあの時は助かりました。今でも、我が家で焼き餅のおいがあると、青柴夫人のご親切が思い出され、決して忘れることができません。

古い記憶を思い起こせば、次男が一歳ぐらいのとき、近所の少女にお守りを頼んでいたら、いきなり「おばちゃん、マー坊を、ソ連兵に取られた」と駆けこんできました。あわてて駆けだして行くと、五・六人のソ連兵が輪になって、子供をかわるがわる抱き、「かわいい」と言っているようでした。私は子供を取られたら大変だと思いましたが、言葉が分からず、ただ不安とこわさにひきつった顔を、笑顔にかえるのに必死でした。しばらくして子供を返してくれましたが、私は我が子を抱き家にかけて込みました。

またある夜、満州人がピストルを持って「手をあげろ」と言いながら、明かりのついている我が家に入ってきました。当時、大連は九時以後は外出禁止となっており、給料をもらわなければ食糧も買えず、

支払いを待って遅くなった少年を連れてきました。

ピストルを持ったこの男は、この前まで、購買部で米の配達をしていた男でした。男も「奥さん、知っている」と言います。「何か棒はないか」と言うので、「ない」と答えたら、台所まで探しにきて、すりこぎを見つけて私たちの目の前で、何度も少年をたたきました。私たちはただ見ているだけで、どうしてあげることもできませんでした。翌朝まで預けると言って、男は帰って行きました。もし少年がいなくなれば大変と、その夜は一晚中眠れませんでした。満州人から、「奥さん、キャピタン世話しようか」とか「子供を売ってくれ」とかいろいろ言われましたが、当時二十八歳の私は、顔に炭をぬることもありませんでした。

引揚げのため昭和二十二年二月二十二日、零下十七度のなか、学校に集合しました。

眠いとぐずる長男をたたき起こし、次男は綿入れの袋に入れ、綿入れのねんねこでおんぶして、便所に行くこともままならず、二人の子供の手を引いて行きました。私はおむつを持つだけ、主人は私の着物を二枚、

羽織二枚に小さな布団を持つので、手いっぱいでした。

学校から埠頭に行くトラックの中で、私たちは、所帯を持って数年ですので、衣類と家具を失っただけですが、長くいた人は、今まで築きあげた、すべての財産を失ったわけですから、ほんとうにお気の毒だと思います。

引揚船に乗ったものの、ゆれる甲板での用便や、おむつの洗濯など、苦勞しました。内地に一步足を踏み入れたら死んでもよいと熱望した日本が遠くに見えたとたん、あふれる涙でほやけでしまいました。上陸した佐世保の丘に咲いている紅椿、葉の青さと、赤い花びら、暖かい日本が懐かしくまた涙がこぼれました。

母は、毎日ラジオで引揚者の情報を、一生懸命聴いてくれました。衣料品店は品物がなく、閉店していましたが、母は主人や私・子供に服をそろえ、赤飯と鯛で迎えてくれました。親子五人が、転がり込んだ母の食糧調達は大変だったと思います。

大連では、釘一本打つものにも、役所のニーヤにきてもらっていた主人は、親類が何かと見つけてくれる商

売もうまくいきませんでした。私は働きの母と主人の間で、悩む日が続きました。

坊主憎けりや、何とやらで、母は長男を叱り、かばう私をなじる、なおさら泣く子供、これではかわいそうと、畑で二人の子供を抱いて、泣いた日もありました。子供には、寂しい悲しい思いをさせました。でも母の恩は絶対でした。

母も洋裁学校を開き、主人を盛りたてるよう、努力してくれましたが、「この先、母をみる者は自分たちしかない。今、自分を大事にしなければ、そうなるとき、一緒におりにくいだろう」との言葉に、主人はこんな気持ちだったのかと、悲しくなりました。いろいろの行き違いで、とうとう離婚。私は一人住まいの母を捨てることができず、母になっていた次男と三人で、暮らすことになりました。別れた子供と同じ年ごろの子供を見るたびに、どんなに成長したことだろう、もしやこの人ではないかと、じっと見ることもありました。

昭和二十三年に離婚したのち、母と再び衣料品店を

開きました。切符制の時代でした。大風呂敷いっぱい、体を曲げるように荷物を背負い、電車で帰り店に出すと、アツというまに売り切れました。真夏でも子供のオーバーなど、奪い合うようにして売れました。

昭和二十五年に再婚しましたが、主人は衣料関係の仕事をしていましたので、仕入れ、販売などを担当してもらい、我が家の経済をうるおさせてもらいました。主人は大腸ガンになった母に、一流の医者病院・病室といろいろ助けてくれました。退院のときは、木炭自動車に乗せました。夏の暑いときでしたが、お湯を足しながら、運転手さんがうちわであおぎ、私たちの背中は火を負ったような、気分の悪くなる暑さでした。長い道中、今では想像できない自動車でした。

気の強い母が泣き、悲鳴をあげ、医者に殺してくれと頼み、まだ小学校前の次男をだまして、包丁を寝床に隠していました。見ている私たちもつらかったが、母には一日でも長く生きて欲しいと望み、ついにモルヒネに頼るようになりました。当時、医療保険はなく、今のようにありがたい時代ではありませんでした。

「ガン」は家、蔵をもなくす病気でした。主人が手掛けた別の事業も失敗し、母の死とともに銀行の不渡りを出してしまいました。それから坂道を転げ落ちるように、家は傾き、どん底の生活を送りました。

私も三十八歳で、生まれて初めて働きに出ましたが、再婚した夫のおかげで、母に孝養することができました。私ひとりでは、何もできなかったでしょう。

前夫が亡くなった後、十七年ぶりに成人した子供たちと再会しました。長男が駅までバイクで送ってくれたときは、しっかり背にしがみつき、このまま死んでも良いとさえ思いました。長女夫婦も、再婚の私たち夫婦をいろいろな所に連れて行ってくれ、とても良くしてくれました。

平成八年の春、主人は景色のよい場所の家と、十分な年金を残して亡くなりました。悲しい日々でした。

あらあらし 呼吸も絶えし死顔の

白きほうたい 何を語るぞ

親族の心尽くしのありがたく

十日目にして 声出して泣く

娘の年の それより長き めおとなれど

娘の悲しみ 我よりふかく

五十年近い夫婦の歴史は長く、楽しいことつらい思
い出、決して平坦な道ではありませんでした。

これからは 一人で過ごす 日々なりき

四季おりおりの 思い出胸に

今は、二人の子供を授かって、近くに住んでいる娘
に、頼りきっています。

長男は、今、中国語を習っています。

私も元気なうちに、あの美しい大連がどんなに変わっ
ているか、見てみたい。そして子供にも生まれた所を
見せたい。思い出の地の旅を楽しみにしています。

戦争さえ、なければとの思いは強い。あの山崎豊子
著の「大地の子」を涙ながらに読みました。まだまだ
悲しいことがらが、世の中にはたくさんあると思いま
す。日本の子供たちや、英訳して世界の人々にも、是
非読んでもらいたいと思います。

平成八年十月二十二日、喜寿のお祝いに、県立門司
高女を昭和十二年に卒業した仲間が、四十八人集合し

ました。中には、卒業以来、六十年ぶりに会う友達も
いました。還暦のお祝いには、六十一人集まったのに
あれから十二人亡くなられたとか・・・お世話をし
てくださった幹事の方々は、大変だったでしょうと、
感謝しております。懐かしい青柴さんに、久しぶりに
お会いしていろいろお話することが、できました。
青柴さんには、我が家の息子の嫁を世話していただ
き、現在も時々音信があります。

華やかな実業団の投手時代を過ごされた青柴氏の生
涯は、涙なくしてお聞きすることができませんでした。
本当に戦争とは、むごいものです。青柴氏は、昭和二
十年八月一日、召集され、その年の十一月一日には、
戦病死されていたことが、何年も過ぎて知らされたそ
うです。

奥さんは、御主人が日本に帰り、野球界に復帰され
ているとの噂を信じて、十カ月の息子さんと三歳の娘
さんを連れて、京都のご主人の実家に、引き揚げ、そ
こで消息のいまだないことを知りました。戦病死の御
遺骨は、二十四年に、白木の箱に紙切れ一枚で、帰国

されました。その後、実家のご両親と二人の子供さんと暮らし、教員生活三十一年、一生懸命の人生だったそうです。今はお孫さんも社会人と大学生になられ、息子さんと同居、閑静なお宅で幸せな晩年を、過ごされていらっしやいますが、定年でやっと落ち着いた生活をされるようになり、静かにご主人のことを考えると、戦後の病院は、他国兵と一緒にだったそうで、病身を横たえて、さぞ大連に残された妻子のことを氣遣い、つらいくやしい思いだったろうと想像する、と涙ぐんでおられました。

もぎ取られた青春、もぎ取られた人生、今なお戦争の傷あとが、胸を痛めます。

【執筆者の横顔】

大正八年に生まれた照子さんは、四歳のときに生みの母親と死に別れたが、後妻としてこられた義理の母親に、「蝶よ花よ」と育てられ、なに不自由のない幸せな子供時代を過ごしましたが、運命のいたずらか、成人してからは恋人との別れ、見合結婚、渡満、出産、

終戦、昭和二十二年苦難の引揚げ、二十三年二人の子供を手離し離婚、二十五年再婚し、二人の子供に恵まれ幸せな日々も、義母の死とともに事業の失敗、どん底生活に落ち、生まれて初めての就職、と紆余曲折の人生を歩きました。

前の御主人の死後、十七年ぶりに別れた長男、長女との再会、喜怒哀楽、苦のはげしい時代を乗り越えられたのも、照子さんのおおらかでおっとり構えている性格が、人に好かれたからだと思えます。

つらいこと、苦しいこと、悲しいことは、口にもださず忘却の彼方に押しやり、楽しかったこと、嬉しかったことをいつも夢みているかわいい方です。

断片的に書かれた文章も、思い出し思い出し、うまく表現もせず、淡々とした書き方は、常に人様のことを考え、自分より他人様の方が、もっともっと苦労していると思っていらっしゃる心の優しい気の遣い方は、さすがお育ちの良さだと思われれます。

(福岡県更正会)

理事長代行 江頭 ふみ子